

日中武術の不可思議な共通性に迫る

心意六合拳 = 柳生心眼流 !?!?

佐藤金兵衛師範より日本古武術、柳生心眼流兵術を学び、
十九世師範を継承した石井敏師範は、その後、拝師した
上海の李尊思老師に学ぶ心意六合拳の技法が、ある時、

かつて学んだ佐藤伝柳生心眼流のそれと、
あまりに酷似していることに思い至ったという。

特異な甲冑拳法を伝える柳生心眼流と、
一気呵成の激しい拳法として知られる心意六合拳。

そこにはどんな共通性が見出されるのか!?

文◎天龍武術会主宰・石井敏

構成◎本誌編集部

■ 初めに

筆者は昭和53年（1978）から全日本中国拳法連盟・大和道本部にて佐藤金兵衛先生に師事し、大和道、柳生心眼流兵衛、浅山一伝流兵衛、大東流等の日本武道および太極拳、八卦掌、形意拳、少林拳等の中国武術を学び、柳生心眼流では昭和63年に佐藤金兵衛先生より、星貞吉義盛からの伝授である盛の一字を入れた「義盛」の名を頂いた。

全日本中国拳法連盟において長年後進の指導に当たっていたが、現在は天龍武術会・日本孫膺拳協会の主宰し、中国、台湾の老師方との交流の機会を得、毎年中国を訪問して中国伝統武術の研究を続けている。

6年程前から縁あって上海在住の心意六合拳・查拳大家、現在92歳の李尊思老師に拝師し、正式に心意六合拳

（第八代）、河南查拳（第六代）の伝承者となっている。

心意六合拳には柳生、心眼流と類似した技が多く、李老師の元での学習当初からおぼろげながらに在りし日の日本と中国の武術交流を想像していたが、学習が進むにつれ、全く同一のルーツを持つとは思えないほど酷似した技法の多さに、単なる空想であった両派間の接点の存在が徐々に確信へと変わりつつある。

■ 心意拳の発祥と他門派への影響

明代末期（1600年頃）の武術家・姬際可（姫隆峰）は、「神槍」と称される優れた槍の名手で、槍法の理論を拳術に応用し、心意拳を創始した。心意拳の術理は、少林拳発祥の地であ

り、天下の武術は少林より出ずる」といわれた嵩山少林寺、並びに陳氏太極拳発祥の地である河南省温県陳家溝を経て、後の様々な流派に展開していったと考えられる。

姫際可には嵩山少林寺における教授の伝承があり、これが今に伝わる少林心意把（心意十二勢）と言われている。また、陳家溝に伝えられた心意拳の拳譜とその理論は、それまで陳氏一族に伝承されてきた武術体系に大きな影響を与え、さらに吐納導引法や経絡医学などが加わることにより、今日見られる太極拳の型と理論がまとめられたと考えられている。

陳家溝に伝わっていた武技が現在のような太極拳の型にまとめられる以前は、紅袍捶、十五紅、十五砲などと呼ばれ、心意六合拳や形意拳と同様、單式の反復練習（ひとつの技を繰り返す練習法）を行っていた。現在でも陳式

太極拳二路（砲捶）には、心意六合拳や形意拳の特徴的な歩法である跟歩（前足を進めた後、すぐに後ろ足を引き寄せる歩法）による單式の反復形が多く、心意拳の影響が色濃く残る。

姫際可の創始した心意拳はその後、戴龍邦と馬學礼によって山西派と河南派の心意六合拳として分派し、さらに戴氏心意拳を継承した李洛能は心意拳から形意拳を創始した。

李尊思老師の伝承する心意六合拳の系譜は以下のようになっている。

「姫際可→馬學礼→張志誠→李政→袁常青→買金魁→李尊思」

姫際可から馬學礼に伝えられた心意六合拳は、主に河南省の回族の間で伝承された。十大形（龍、虎、猴、馬、鶏、鶴、燕、蛇、鷹、熊）と称される十種類の動物を模した單式拳と数種類の附拳、四把捶などの数種の套路、硬気功の一種である排打功、心意六合刀、心意六合及手劍、心意六合槍、心意六合棍、長梢子、二節棍、鷄爪鎌等の武器法から構成されている。

十大形はそれぞれの動物にさらに数種類の形があるため、武器法まで含めると百二十以上の型が伝わっている。

■ 心意六合拳と柳生心眼流

日本伝統の甲冑武術である柳生心眼流にも、心意拳（心意六合拳）との接点を予感さ



李尊思老師（左）と筆者



上海・清東清真寺にて、李尊思老師より心意六合拳の指導を受ける筆者

【李尊思老師】（1918～）



1918年、河南沈丘の回族の家庭に生まれる。十歳から少林拳を学び、十三歳から三年間少林寺に入って武術を修行した。下山後、袁世凱の貼身保鏢を務めた河南查拳大師・馬忠啓から十路彈腿、二十路查拳（正十路、反十路）、及び十八

般の兵器を学び、武漢において買金魁から心意六合拳を、上海の郭文志より湯瓶七勢拳を学んでいる。1944年、李老師27歳の時、日本において東アジア武道大会が開催され、諸民宜を団長とし、排敵名家の宗振甫、查拳名家・海深相らと共に参加。心意四把、二節棍、查拳大鎌子を表演して表彰を受けた。しかしこのとき、これを快く思わなかった日本の剣道家の挑戦を受け、真剣との試合に根をもち死を覚悟して臨んだが、結果2度まで心意六合棍の技で相手の刀を跳ね飛ばして勝利を納めた。武器法では心意二節棍（1メートル程の棒2本を鎖でつないだ武器）を得意とし、かつて二節棍を手に、武器を持った斧頭党の数十人を相手にして友人を救い出したこともある。92歳の現在も上海にて現役で後進の指導に当たっている。



台湾・彰化にて、向かって右端より佐藤金兵衛師範、中央少林金鷹拳・陳安順老師、筆者。佐藤師範は我が国における中国拳法指導者の草分けでもある



昭和35年(1960)、日本古武道振興会による明治神宮奉納演武会にて、柳生心眼流甲冑柔(共術)を演武する佐藤師範(写真提供/全日本中国拳法連盟)

【佐藤金兵衛先生】(1926~1999)



1926年、福島県に生まれる。幼少より祖父に大和流(やまとりゅう)柔術を学ぶ。中学卒業後、満州へ渡り「人間の条件」以上の辛苦を遂げ帰国。

その後、八光流柔術、合気道、武田流合気道、大東流合気柔術、荒木新流柔術、天神真

楊流柔術、柳生心眼流共術、一天柳心曹介流柔術、浅山一伝流休術、九鬼神流棒術・高木楊心流柔術、真鑑流骨術、影山流剣術、神道自然流空手等を学ぶ。昭和33年(1958)台湾から来日した王樹金より太極拳、形意拳、八卦掌を学び、陳延順より少林金鷹拳を学ぶ。この頃、王樹金招請のため全日本中国拳法連盟を組織し、東京都北区に道場を開いて武術の教授を行うと共に、多くの著書を出版、日本における中国武術の草分け的存在となった。また、それまで学んだ武術の集大成として、自ら大和道(たいわどう)を創始した。その後も北京八卦掌第三代・李子鳴、上海如意六合門盧嵩高の教えを伝える張錫榮等、中国の著名な武術家と親交を持ち、生涯、武術の研究と振興の育成に力を注いだ。日本古武術の中では特に柳生心眼流を得意とし、全日本中国拳法連盟では中国武術の修行者にも、柳生心眼流の素振りや必須科目として教授していた。(写真提供/全日本中国拳法連盟)

せるような共通性がみられる。筆者の学んだ心意六合拳と柳生心眼流には酷似する技が非常に多く、現時点ではあくまで個人的な推測の域を出ないが、江戸から幕末にかけて大陸の武術家が日本に渡来し、柳生心眼流の形成過程に少なからず影響を与えたのではないかと考えている。

柳生心眼流の歴史

柳生心眼流は、江戸初期、奥州(宮城県)において神眼流・首座流・神道流・戸田流を学んだ流祖竹永隼人が、江戸に出て柳生但馬守のもとで三年間修行した後、但馬守より柳生の名を許されて柳生心眼流を開いたと伝えられている。

その後いくつかの系統に分かれて伝承されているが、宮城県での伝承は、柳生心眼流中興の祖といわれ、幕末から明治初期に活躍した星貞吉によって独特の工夫が加えられたようである。

柳生心眼流流祖・竹永隼人から星貞吉に到るまでの系譜は以下のようになっている。

「竹永隼人→吉川市郎左エ門→伊藤久三郎→小山左門→相沢東軒→千葉義祐→佐藤森之助→加藤権蔵→星貞吉(ただし、相沢東軒→加藤権蔵まではすべて星貞吉の師とも言われる)」

星貞吉の柳生心眼流は、他流の柔術に見られるような逆手、投げといった技法が主体ではなく、その体系のほとんどが当身から構成され、日本にあつて他流と趣を異にしている。

柳生心眼流中興の祖・星貞吉

星貞吉(1821~1898)は宮城県栗原郡新田村の農家に生まれ、郷里の佐竹勇三郎や佐沼の相沢道場で柳生心眼流を学んだ後、各地を訪れて研究を重ね、加藤権蔵から柳生心眼流の教えを受けて奥義を極めたといわれている。

しかし現在、加藤権蔵なる人物の素性は定かでない、星貞吉が出羽に向向いて加藤権蔵から学んだという説もあれば、貞吉が師のあだ討ちに失敗した際、加藤権蔵という人物が自ら尋ねて来て伝授したという説もある。また、師のあだ討ちも真偽の程は定かではないとする研究者もいて、その修行過程には不明な点が多く、どこかで中国武術との接点があったとしても不思議ではない気がする。

柳生心眼流の体系

佐藤金兵衛先生の教授した柳生心眼流「素振」の一人型は、初伝、中伝、奥伝にそれぞれ「片衣」「両衣」「袖附」打込、折取、標取、大揃の七本があり、全ての型がそのまま二人で組んで行う組取になる。素手の一人型以外には、剣術、棒術などの武器による組型が伝えられている。佐藤金兵衛先生はこれ以外にも「五行の巻」「九字切秘

伝」等の法術を伝授されたそうだが、伝統的なものではないという理由から教授はしていない。

佐藤金兵衛先生の系譜では、星貞吉義盛以降、弟子に柳生心眼流の名(武名)を与える伝統が継承されており、「星貞吉・義盛」→高橋彦吉・政治・鈴木兵吉・武盛→鈴木専作・猛盛→佐藤金兵衛・清明」と伝承され、筆者も佐藤先生より奥伝の巻物を頂いた際、「義盛」という名を与えられている。

日本の武道における心眼流の特異性

日本の古武道には大別して刀や槍、薙刀などの武器を持って戦う武器術と、素手で関節技や投げなどを行う柔術がある。武器術は二人組んで行う組稽古が多いが、一人型の練習体系を持つ流派も少なくない(居合や棒術、槍術など)。これに対し柔術は、ほとんどの

流派が相手に掴まれた状態、あるいは相手の突きや蹴り、武器の攻撃等に対し、これをかわして技をかける、あるいは当身を行うような組稽古を主体としており、柳生心眼流のように素手の一人型を練習体系としている流派は非



佐藤師範より筆者へ授けられた柳生心眼流奥伝巻物の一部（なお、石井師によれば、最後の技名はすべての奥伝巻に記載されるわけではないらしい）

常に珍しい。

一方、中国武術においてはほとんどの流派が套路と呼ばれる一人型を練習し、王向斉の創始した意拳のように、基本的な站樁功以外一人型の練習体系が存在しない流派のほうが特異な拳種といえる。

また、柳生心眼流の初伝、中伝、奥伝の一人型はそのままの形で組手になる。これは武器法の応用とも考えられなくはないが、一人型とその形をそのまま組手に応用する練習法は、少林寺の壁面から考案されたといわれる少林羅漢十八手や八歩連環拳など、中国北派少林系の武術にも見られ、ここにも少なからず中国武術との接点が想像される。

■ 両派の拳理と風格

柳生心眼流と心意六合拳を比較した場合、心意六合拳はその名の通り意識の在り方を重視し、敵の攻撃を打砕く氣勢を養う。柳生心眼流もまた心眼と

いう名を冠し、一撃で敵を貫き通すような気迫に重きを置いている。

型はどちらも直線状の短いものであり、攻撃を仕掛ける際の技の連続性とスピードにも共通性が感じられる。

心意六合拳は心・意・氣・力の一致を説き、心が意を導き、意が氣を導き、氣が力を導くとし、心・意の習得を重視しているが、柳生心眼流においてもその伝書では様々な比喻を用いて意識の使い方を説いている。

柳生心眼流では自己の集中力を高め意識を高揚させ、且つ敵の氣勢を挫くため、掛け声を発する。伝書にも「掛け声のこと」として初心のうちから良く稽古するようにと書かれている。

一方、心意六合拳には「雷声」と呼ばれる発声法があり、発力の瞬間、呼吸とともに提勁（体内の重心を上方に引き上げる発力法）を行うことで声を発する。

余談になるが、雷声を発する際の提勁は口伝であり、心意六合拳から派生

した形意拳には雷声は伝わっていない。現在筆者の知る限り、山西車派の一部を除くほとんどの形意拳は「沈勁」（体内の重心を沈める発力法）のみで、「提勁」の失伝と共に雷声も伝承されなかったのではないかと考えている。

心意六合拳の強い保守性に対し、形意拳は広く門戸を開いて教授して多くの門人を輩出したが、その反面、重要な部分を意図的に隠して教授したのではないかと思われ、心意六合拳にあるいくつかの重要な要素が形意拳に存在しない。おそらく口伝として伝えるうちに失伝してしまったのではないかと推測している。

心意六合拳の特徴的な発力法である「提勁」は、呼吸と共に重心を引き上げることで力を発するが、柳生心眼流にも体を伸ばし重心を上げる動作が少なくない。柳生心眼流の体の浮き沈みによる攻撃には、「提勁」「沈勁」を連続して行う心意六合拳との共通性を感じる。

武道関連書籍買受

誠実評価にて

高価買受いたします

◆ 特価 残部 僅少 御案内 ◆

宮本武蔵玄信	二万五千円
日本剣道史	九千円
鹿島神伝 直心影流	一万二千円
武芸流派大事典	一万円
図解 手裏剣術	藤田西湖 六千五百円
図解 捕縄術	藤田西湖 六千円
図解 捕縄術	藤田西湖 七千五百円
神道夢想流杖術図解	藤田西湖 六千円

(税別)

高山本店

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町2-3

神田古書センター1階

TEL: 03-3261-2661

FAX: 03-3264-0680

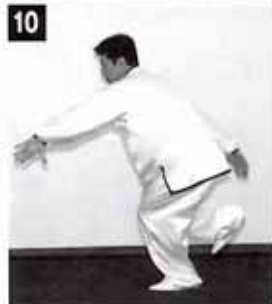
HP <http://takayama.jimbou.net/>

E-mail: zm7h-tkym@asahi-net.or.jp

心意六合拳「虎抱頭」



心意六合拳「猴摘桃」



心意六合拳にも上下の振りによる攻撃が多く見られる。猴摘桃（⑨～⑫）、虎抱頭（⑬～⑯）、砸拳、十字翻花の單式は、全て踏み込みと同時に腕を回し、下から上、上から下への振り打ちによる連続攻撃を行う。特に猴摘桃、虎抱頭は動作の流れだけではなく振り上げた時の体勢も心意流の振り打ちと非常に良く似ている。

柳生心眼流「初伝・振り打ち」

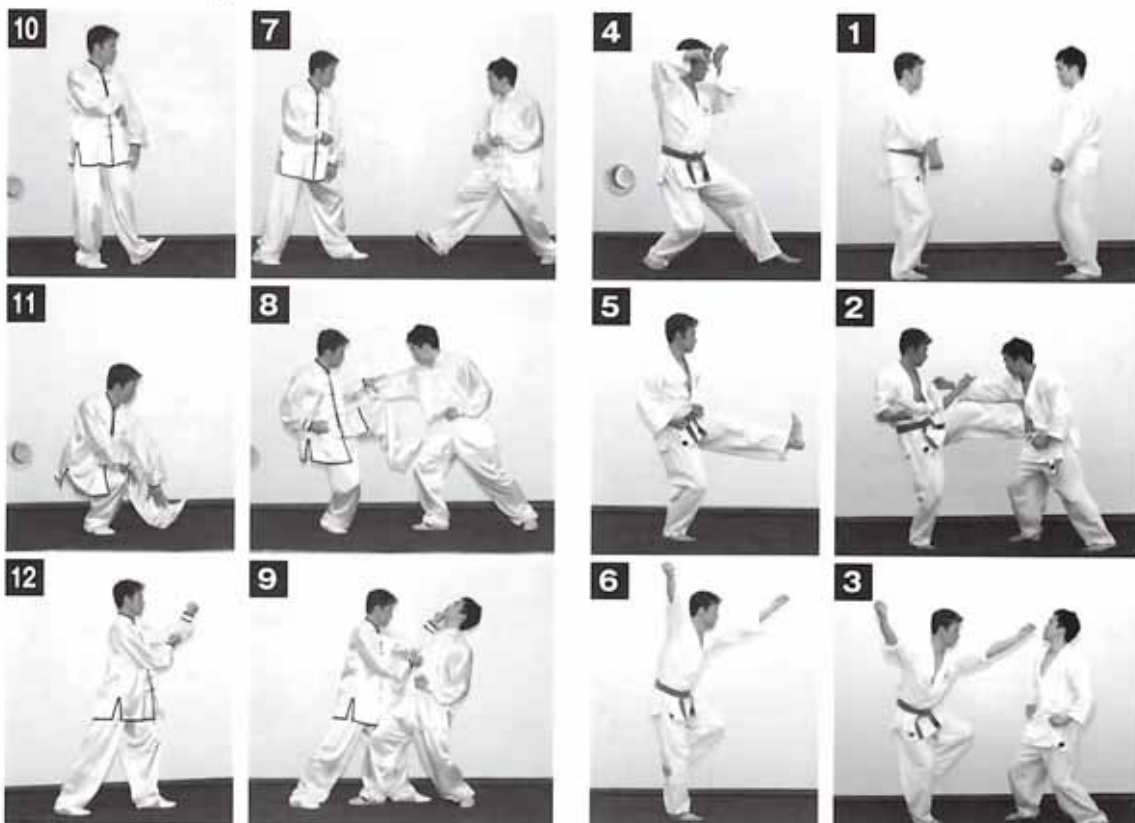


柳生心眼流の初伝「振り打ち」は「蓋振り三才刃の如し」といわれ、柳生心眼流で最も長く知られた動作である。まず、両足を揃えた構えから一歩退いて両手を腰にためて気合を掛け、左・右と拳を振り上げる（①～④）。次いで頭上の拳を大きく振り落とす（⑤～⑧）。※写真は逆例より。

柳生心眼流・初伝「振り打ち」と心意六合拳の各技法

下の①～④は柳生心眼流初伝「片衣」の組取、⑤～⑧は猴摘桃の用法例。片衣は片手で胸倉を取られる設定となっているが、初伝の振り打ちは様々な応用が発展するものと口伝される。ここでの猴摘桃の用法は最後に肘打ちとなっているが、低く入って振り上げる右手は、金的からアブを打ち上げ、そのまま肘を入れる用法となる。





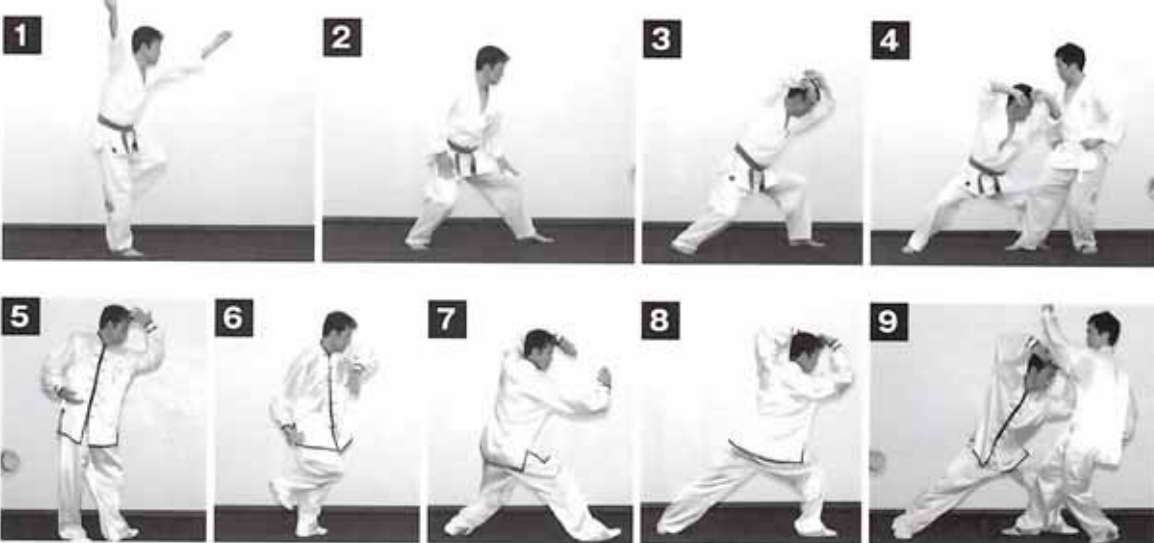
柳生心眼流・初伝「袖附」と心意六合拳「野馬分鬃」

心眼流・初伝三本目の「袖附」は半身になりつつ両腕を開き、敵の突きを流すと同時にカカトで蹴り込み、すかさず両手を開いて突き上げて、左拳頭で敵を牽制する(①)。(②)このカカト蹴りから両拳の突き上げは柳生心眼流・初伝に共通した動作であるが(④)⑤は初伝「片衣」における所作、心意六合拳「野馬分鬃」にも全く同じ用法がある(⑦)⑧。⑨⑩⑪は単独動作

心眼流・初伝では、前後に振り上げた両手を打た下ろした後、腕を頭に巻きつけるようにして肘打ちを行う(①-③)。(④)は組取。同様の動作は、心意六合拳の鶴三把、猿摘桃、小龍形(⑤-⑧)を連想させる。特に小龍形で下から敵の胸やアゴに肘を打ち上げた形は、心眼流と間違えるほど良く似ている(⑨)

心意六合拳「小龍形」

柳生心眼流・初伝「肘打ち」と



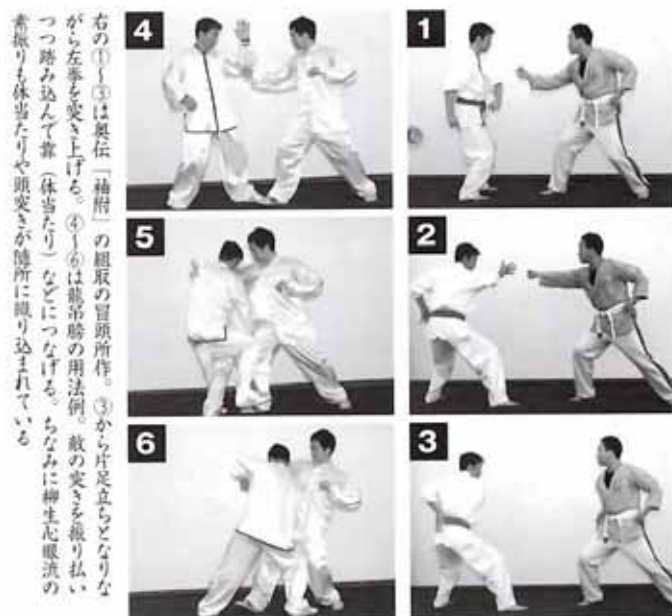
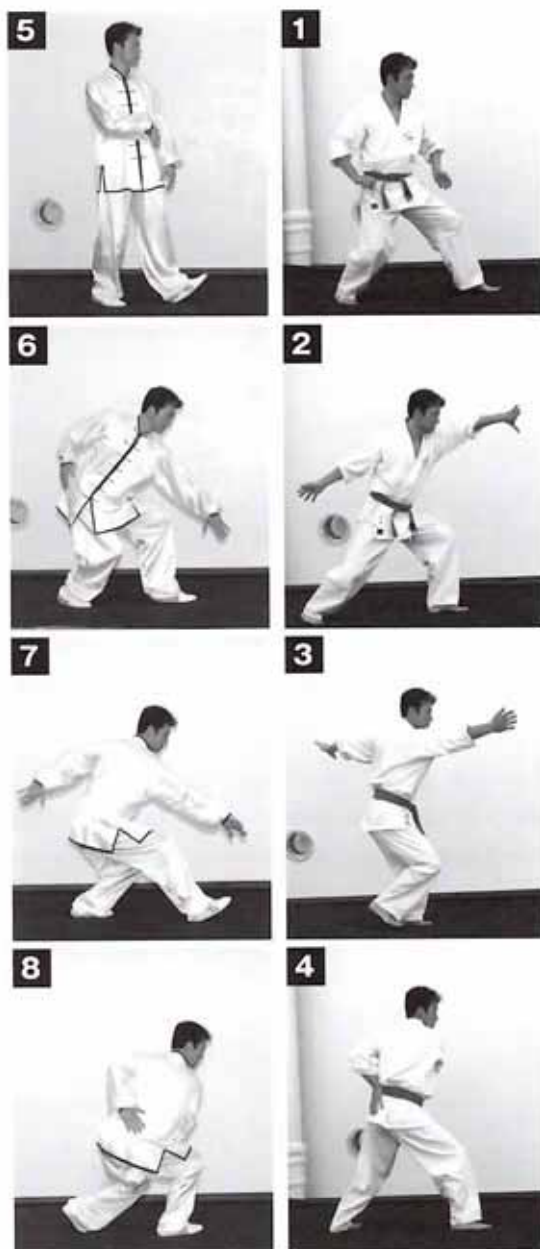
両派の技法比較

基本的な構えを比較すると、柳生心眼流は甲冑の袖や籠手など金属部分を前面に出すことで敵の槍

や矢の攻撃をよけるとしているが、敵に対して常に半身になるその体勢は、三尖相照(鼻先、肩、膝を前に向けた半身の体勢)を崩さない心意六合拳の構えと良く似ている。柳生心眼流初伝の振り打ちとは、体を反転させながら両腕を振り上げ、敵の攻撃を捌きつつ下から金的、腹、胸、あごを打ち上げる。次いで体を逆方向に反転させ、振り上げた手を敵の頭頂から腹部にかけて一気に打ち下ろす。素振り三年刃の如し(素振りを三年間修練すれば刃物のように鋭くなる)と言われ、敵のどんな攻撃にも素振りだけで事足りるというほど、柳生心眼流において最も基本であり、代表的な動作である。心意六合拳にもまた同様に上下の振りによる攻撃が多く見られ、括地風(地面を擦るような低い蹴り技)と合わせて実践

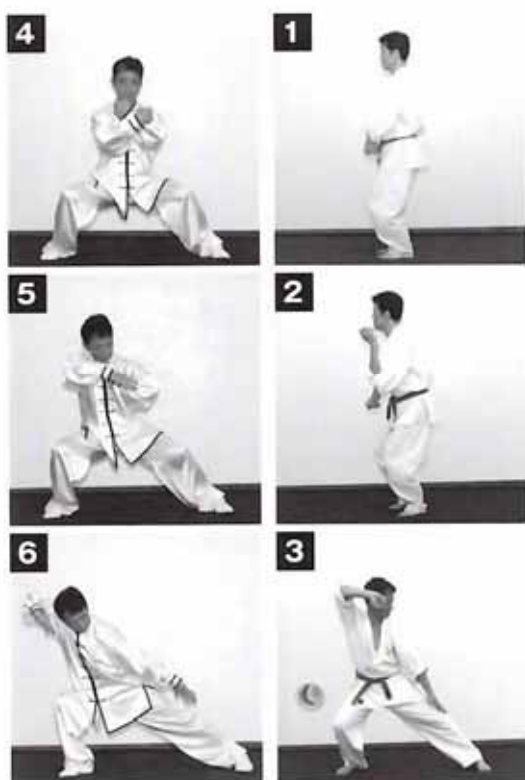
柳生心眼流・奥伝「袖附」と心意六合拳「龍吊膀」

心眼流・奥伝の二本目「袖附」では、足を入れ替えたがら腰を回転させ、両手を右から左に振り回し敵の突きを打ち払う（①～④）。心意六合拳の龍吊膀もまた、同様に腰の回転で両手を左右に振り、敵の攻撃を払う技である（⑤～⑧）。

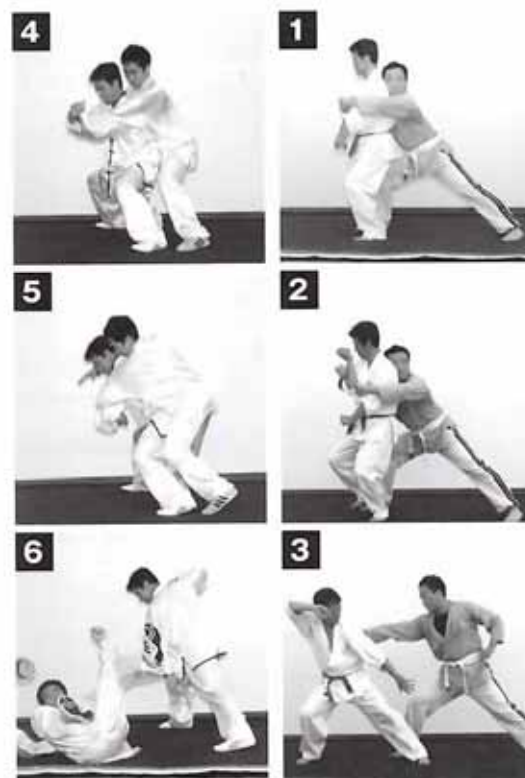


右の①～③は奥伝「袖附」の組取の冒頭所作。③から片足立ちとなりながら左拳を突き上げる。④～⑥は龍吊膀の用法例。敵の突きを振り払いつつ踏み込んで靠（体当たり）などにつなげる。ちなみに柳生心眼流の希振りも体当たりや頭突きが随所に組み込まれている。

柳生心眼流・初伝「大捌」と山西派形意拳「鷄形四把」における轉身



心意六合拳と同様となる形意拳にも柳生心眼流と非常に近い技がある。心眼流・初伝「大捌」冒頭で後ろからの抱え込みをほどこしながら振り向き形は（①～③）。山西派形意拳「鷄形四把」の轉身（④～⑥）と、形も用法も全く同じである。



上の①～③は心眼流・初伝「大捌」の組取（ここから蹴り、両拳突き上げ、肘打ちへとつながる）。④～⑥は「鷄形四把」轉身の用法例。心眼流の組取では単に敵の抱え取りから逃れるだけだが、実践応用として鷄形四把の用法と同様の、投げ技への展開も口伝される。

で多用する。用法も柳生心眼流と同じく防衛と攻撃を兼ねたものであり、両腕を上下に回転させることで敵の金的

から頭部までの可能な部位を攻撃する。柳生心眼流には初伝、中伝、奥伝以外に秘伝とされる数本の型があるが、

佐藤金兵衛先生より学んだ 柳生心眼流・中伝 「霞の構え」



右足に重心を置き、左足はつま先立ちとして半身になる。両手は五指を軽く曲げて握り、掌の中には卵ひとつ分の空間を作る。右手は右コメカミに取り、左手は右手の下方で胸の前あたりに置く。さらにこの構えで敵を威嚇するように声を発する。これは激しい呼吸によって自然に発するものであり、佐藤先生はこの氣勢を、「いがむ」と説明されていた。いがむとは大が舞先にしめる寄せて喰う状態や、猫が背中を丸くし毛を逆立てて獲物に襲いかかろうとする体勢のことをいう。



李尊思老師が示した 猴豎蹲の構え



左虚歩で半身になって立ち、両手は五指を曲げて軽く握る。右手は右コメカミ付近、左手は右の肘辺りに添え、この体勢で敵を威嚇するよううな声を発する。これは明確な声ではなく「激しい呼吸」と言ったほうが良いかもしれない。この形は早式の一部ではなく、微塵動で敵に襲い掛かる前の氣勢を発する構えとして教わったものだが、佐藤金兵衛先生から学んだ柳生心眼流・中伝の構えに驚くほど酷似していた。



この型はいずれも敵の攻撃に対する単発的な対応法であり、心意六合拳の技そのままとはいえるほどの類似性が見られる。秘伝のため詳細は紹介できないが、この中には心意六合拳の連環把（敵の攻撃を跳ね上げ、次いで転身しながら肘を打ち込む型）や、鶴形歩、野馬分鬚の用法をほとんどそのまま行つたような技もある。

佐藤金兵衛先生の柳生心眼流と李尊思老師の心意六合拳には、他にも外見及び用法の良く似た技が多いが、中でも特に印象が深く、今回柳生心眼流と心意六合拳の類似性について紹介するきっかけとなったひとつの型がある。

それは「猴豎蹲の構え」として李尊思老師が示した型で、敵に襲い掛かる前の氣勢を発する形として教わったものだが、左虚歩で半身になり、右手を右こめかみ、左手を右肘のあたりにとるその体勢は、佐藤金兵衛先生から学んだ柳生心眼流中伝の「霞の構え」に酷似していた。

また、どちらもこの体勢で敵を威嚇するような声を発する。この声は両派共に激しい呼吸によって自然に発するものであり、これほど特徴的な型が日本と中国で全く無関係に発生したとは考え辛く、それまでおぼろげに想像していた柳生心眼流と心意六合拳の接点、この構えの存在により、一気に鮮明になったような印象を受けた。

おわりに

心意六合拳と柳生心眼流、どちらも保守性が強く、過去の伝承には不明な点も多いが、これらの類似性には単に偶然の一致とは思えないものがあり、その伝承過程に何らかの接点の存在を感じさせる。

柳生心眼流、心意六合拳共に現在複数の伝承系統が存在し、異なる系統によって風格や体系にはそれぞれの特徴があるため、今回紹介した内容は他の伝承系統には必ずしも当てはまらないかもしれないが、あくまでも筆者が佐藤金兵衛先生から学んだ柳生心眼流と、上海の李尊思老師より伝えられた心意六合拳からの考察として御理解、御容赦を頂きたい。

【石井 敏】 Satoshi ISHII



1978年、佐藤金兵衛師範主宰の全日本中国拳法連盟入門。太極拳、形意拳、八卦掌、少林拳、日本古武道（柔術など）を学ぶ一方、上海より来日した杜連老師より陳式太極拳、醉拳、養拳などの個人指導を受け、その後、馮正宝老師より山西派形意拳や各種武器法などを学ぶ。1984年、中国・武漢で開催された国際太極拳親善交流大会にて陳式太極拳で金賞受賞。日本における武術太極拳全国大会にて形意拳第一位。1995年、台湾・孫精拳国際連盟より日本分会設立の要請を受け訪台。2001年、日本孫精拳協会設立。山東省青島の趙永昌老師より孫精拳の正式な伝承者として認定される。1982～2007年まで全日本中国拳法連盟の理事・指導員を務めた後、上海心意六合拳・養拳大家の李尊思老師に拝師する。2008年4月、日本孫精拳協会を母体として天龍武術会を創立、現在に至る。日本兵法大和道師範、柳生心眼流兵法十九世師範、心意六合拳第八代伝人、八卦掌第五代伝人。